

Genuine Community and Real Community : community as a complex-open system for management of conflicts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/951

純粹コミュニティと經驗的コミュニティ —コンフリクト処理の複雑・オープンシステム—

橋 本 和 幸

Genuine Community and Real Community
—community as a complex-open system for management of conflicts—

Kazuyuki HASHIMOTO

概 要

本稿は、一つはコミュニティ論を社会学の歴史の中で展開すること、二つに、デッドロックに乗り上げた感のあるコミュニティ論を、経験のレベルで再考すること、以上の点に焦点を合わせている。特に、後者についてはコミュニティ論の新たな理解の必要を主張し、そのための基礎作業として、コミュニティ概念の「社会的」呪縛からの解放を目指して、三層モデルとしてのコミュニティを提案する。かかる作業が前者の社会学の展開史の中で遂行されねばならないことは、言うまでもない。

目 次

- 1 コミュニティ論の整理
 1. 1 古典的コミュニティ論
 1. 2 20世紀初頭のコミュニティ論
- 2 アーバニズムとコンフリクト
 2. 1 パークとコミュニティの二層化
 2. 2 ワースとアーバニズム
- 3 近隣の再発見と二つの世界
 3. 1 アーバニズム論批判
 3. 2 コミュニティ解放説とネットワーク論
 3. 3 二層化した世界
- 4 經驗的コミュニティ
 4. 1 不確定性とコンフリクト
 4. 2 經驗的コミュニティ

1 コミュニティ論の整理

1.1 古典的コミュニティ論

理論は、その時代を一元的に反映するものではない。19世紀から20世紀へと時代が経過するなかで、社会の構造の変動によって提起された理論も、さまざまに修正がなされてきた。コミュニティの学説について、少し経緯を述べてみよう。ここでは、理論の展開との関連で、この時代を代表するデュルケムとテンニエスに簡単に触れる。

(1) デュルケムの時代認識

19世紀の後半は、ドイツやフランスの産業化のもとで、ヨーロッパの社会学は大きな変化を蒙ることになる。このことは、マックス・ウェーバー (Weber, M.)、エミール・デュルケム (Durkheim, É.)、ゲオルグ・ジンメル (Simmel, G.) そしてフェルディナント・テンニエス (Tönnies, F.) らの当時の現代社会論を垣間見るだけで理解できる。デュルケム (1893) は、この時代を次のように診ている。

地域的団結を基礎としている組織 (村または都市、市、区、州など) がいかに影うすれて、後退していつているか後に説明するだろう。確かに、我々各人は、あるコミュニティやある県に属しているが、我々をそこに結びつけている連鎖は、日毎に弱まりゆるくなっている。これらの地理的区分は、大部分人為的なものであり、もはや我々に深い感情をよび起こすものではない。地方的精神は、消滅してしまっていて再生すべくもない。愛郷心は、思いのままに再興できなくなってしまうという廃語となっている。

デュルケムにとっては、確かに「無数の無組織的諸個人の活動は、これらの集団をはるかに越えてひろがっており、他方、そこに起こる大部分のことがらに対して、我々は無関心のままだいる」状況が生じているとしても、いま必要なことは、国家と諸個人との間に一連の第二次的集団を挿入することなのである。この第二次的集団とは、かつて自治体組織の主要部分であった同業組合＝職業的集団である。

彼は、その内部に職業的な道徳と法律をもつ同業組合的な改革によって、新たな合意形成が可能になるという。すなわち、「社会体系の健康」は、「各職業において、労働量、種々の職能者の公正な報酬、彼ら相互に対する義務と彼らの共同体に対する義務等々を規定する諸規則の体系」によって可能になるのである。デュルケムの「この時代」には、「共同生活の正常な活動状態に必要な諸器官の体系」が求められることになる。

こうしたデュルケムの時代把握は、分業による差異性と専門性を基礎とする「個人と集団の相互補完性や相互依存性に依拠した有機的連帯」と結びつく (ここでは、前近代社会での機械的連帯と区別される)。

(2) テンニエスの時代認識

さて、デュルケムの時代観と微妙にことなるのが、同時代人のテンニエス（1887）である。すこし詳しく、テンニエスの言うところを追ってみよう。

彼が『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で明らかにしようと試みるのは、地域社会を時代的に区分することではない。人間の相互肯定の関係を意志の類型（本質意志と選択意志）として、その変化を示そうとする。ところで、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念は、確かにテンニエスによる意味付け（ゲマインシャフトは古く、ゲゼルシャフトは新しい）がとくに有名であるが、この両概念はかつては同義語として使用されていた。彼以降、ドイツの歴史のなかで多様に用いられてきている。特に、テンニエスの二分法を理解しようとするなら、歴史哲学的、文化批判的に厳密に検討することが急務であろう。さらに、1840年以後のドイツの社会運動は、マルクスを通じてテンニエスに大きな影響を与えることになった。（ただし、この間の事情については、マルクスによる概念との異同をも含めて詳細な言及が必要であるが、やや煩雑になるのでここでは触れない）。

シュルターとクラウセン（1990）は、言う。

テンニエスは、当時成熟しつつあった問題を解決しようと試み、かかる問題の源泉を正確かつ包括的に認識することに意を注いだ。その際ロードベルトゥスの批判によって修正されながらも、バッハオーフェン、モルガン、ギールケといった人たちの「ゲマインシャフト」の歴史的把握を、「ゲゼルシャフト」の現実的再生産や生産というマルクスの研究に関連づけようとしたのである。

続けてこう述べる。

初期ロマン主義（原文ゴチ）が政治的に明確化し、力強く時には不安をかもしだすものと考えた真正ゲマインシャフトについての問は、そのままの形で今日にも言えることなのである。例えば、友愛（Brüderlichkeit）といった人間社会に基本的な問題は、歴史的には相当古いものであるが、それは私たちが今日啓蒙化された社会（ゲゼルシャフト）とかその計算合理的意志形態とか呼び慣わしている思潮と、イロニーッシュにはあるが、同じ流れに注がれているのである。すなわち、かかる問題は、まさに時代のデルタのなかで、いわゆるポスト・モデルネのなかで、いまなお相変わらず設定されているものなのである。そして、このポスト・モデルネは、実のところ一切のモデルネを規定しつづけてきている、憧れと冷静さという二つの態度のディレンマから脱することはできないものなのである。

若干引用が長くなったが、ここでの主張が、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念の歴史的整理の必要性、ならびにモダンにつづくポスト・モダン（実は、モダンのなかのポスト・モダン）の問題性を指摘していることは明らかである。この二つの点は密接に関連するものであり、この検討は緊急を要する課題であると考えられるが、同時にいまひとつ、テンニエスの時代(ワイマールの時代とするなら、テンニエスの問題はウェーバー、ジンメルにもかかわってくる)に、ゲマインシャフト概念が、彼の主張とは別のところで用いられていたことにも注意しておく必要がある。この点については、筆者は、他の雑誌(1992)で述べている。

人間の意志は、コミュニケーションのレベルで多様な関係をもっている。それは、一方が話しかけると、他方が耳を傾けるという相互行為の形態のなかで意味をもつ。テンニエスは、これを相互肯定の関係とし、「実在的、有機的な生命体」としてのゲマインシャフトと「観念的、機械的な形成物」としてのゲゼルシャフトとに分ける。前者は持続的で真実の共同生活、後者は一時的で外見上の共同生活ともされる。ゲマインシャフトでは、共同居住や共同作業からなる無限の了解と一体性（①血縁者や夫婦は、互いに愛しあい互いに慣れ親しみやすく…、近隣者や他の友人もこれと同様である。②愛しあっている者たちの間には、了解が存在する。③愛しあう者や了解しあう者たちは、行動や居住を共にし、かれらの共同生活を組織する。これらは、ゲマインシャフトの根本法則である）が支配的である。

他方、ゲゼルシャフトでは、基本的に分離しており、「人々はそれぞれ一人ぼっちであって、すべての人々に対しては緊張状態にある」。そこでは、共同財はなにひとつなく、あるとすればそれは擬制（Fiktion）でしかない。

労働者にとっては有害である火酒が、その製造業者にとっては、それを飲むということのためにではなく、それを売るということのためにきわめて有用なものであることはあきらかである。一般に、ある事物がゲゼルシャフト的価値を有するものとなるためには、一方ではそれが独占的に所有され、他方ではそれが誰かある人間によって熱望される、ということだけで十分である。それ以外のその物の性質はすべて、どうでもかまわぬものにすぎない。

ここから商品と「骨折りと労働」というゲゼルシャフト的關係（ゲマインシャフト的關係では所有と享樂）が展開され、交換（契約）と擬制的共同財、抽象的で仮象的な「原子としての個人間の關係」、「物と物との關係」という周知の主張がなされることになる。テンニエスのこうした思考の背景に、有用価値と交換価値を発見するのは容易である。バーナード（Bernard,J.,1973）は、「古くさくてアメリカの地域社会に適用できない時代遅れ」

と述べるが、筆者には社会学における今日の思潮との連続性を読み取れる。

1. 2 20世紀初頭のコミュニティ論

1955年に「コミュニティの定義」を書いたヒラリー（Hillery,G.A.）によれば、コミュニティの内容を通じて94通りの定義を示している。コミュニティ一般（Generic Community）と農村コミュニティ（Rural Community）に大きく二分し、諸文献の整理を通して前者が79、後者は15としている。

ただヒラリーの分類・整理の努力にもかかわらず、彼は、「コミュニティのなかに包み込まれているということ以外に、十分な合意はない」と結論づける。「94の定義のうち、69はコミュニティ生活のなかにみられる社会的相互作用と地域性と共同紐帯であり、約4分の3の70のものは、コミュニティの必須要因として、地域性と社会的相互作用を挙げている」。

また、『コミュニティの社会学』（1973）のバーナードは、「コミュニティを取り扱う書物が現時点でなしうる最大の貢献は、現今、コミュニティの社会学に広く表れている混乱に読者の注意を向けることである」と、皮肉っぽく述べている。ただ彼女も、従来のコミュニティの定義の一致点として、地域性、共同紐帯、社会的相互作用を認める。しかし同時に、彼女は、そこに相異なる二つの概念が含まれていることを指摘する。それは、「ザ・コミュニティ」と「コミュニティ」である。前者は「地域性が基礎的構成要因とみなされる居住地」を指し、後者は「三つの構成要因のうち共同紐帯および社会的相互作用」に注目する。そして、ゲマインシャフトというドイツ語は、後者の意味でのコミュニティの謂である、とする。マッキーバーもコミュニティをゲマインシャフトに、アソシエーションをゲゼルシャフトに対応させている。

さて、コミュニティ概念を、最初に学問的に定義づけたのは、マッキーバー（MacIver, R.M.）である。彼によれば、コミュニティとは、ある一定の地域において、住民が自然発生的な形で営んでいる共同生活のことである。そのコミュニティは、特に地域（territorial area）と共同社会感情（community sentiment）から構成され、そこに住む住民たちは、ともにわれら意識（we-feeling）、役割意識（role-feeling）、依存意識（depending-feeling）を共有している。

マッキーバーにあっては、特定の目的をもち、その目的達成のためにつくられた人為的・利害関係的な組織（association）とは異なり、そのアソシエーションを作る基盤としての基礎社会として、コミュニティを意味づけている。彼は、コミュニティの要件として、共同生活、完結性と統一、共同の土地の三点を挙げる。

マッキーバーのコミュニティ概念とは別に、ソローキン（Sorokin,P.A.）らは、累積的コミュニティ（cumulative community）の概念を提示する。彼らは、地域社会での諸機能

の累積体としてコミュニティを捉え、1920年代のアメリカ社会において、産業化や都市化による急激な変動のなかで、諸機能の累積（紐帯関係の結合）としてのコミュニティが、商取引とか教育といった一つの紐帯（利害関係）としての機能的アソシエーションへと変化していくことを指摘する。地域の近接性（近隣）に基づく包括的な農村社会から、利害関係や行動目標といった契約的な都市社会への変化、すなわち地域社会の解体傾向を発見する。コミュニティとアソシエーションの二分法が、ここに見られる。

さらに、ギャルピン（Galpin,C.J.）は、ウイスコンシン州のデラヴァンの町を調査し、交通・通信手段の発達、農村での生活水準の向上などにより、従来からの田舎町と周辺の農村との関係が、住民の関心の拡大（より広範囲な施設利用など）によって変化してきていることを明らかにし、ラーバン・コミュニティ（rurban community）を提唱する。ソローキンやギャルピンの主張は、鈴木栄太郎（1968）の第一、第二、第三の社会地区や自然村といった概念に影響を与えた。

2 アーバニズムとコンフリクト

2. 1 パークとコミュニティの二層化

人間生態学の立場からの都市（都市環境）へのアプローチは、まずパーク（Park,R.E.）を嚆矢とする。彼が「都市」（1915）で展開する「道徳的組織や地域」（a moral organization, moral region）さらに「自然的外的事実」（a crude external fact）などのタームを目にする時、特にデュルケムの影響を感じる（市場や貨幣経済への言及では、ジンメルもそうであるが）。さらに、空間的配置（構造の分化）——接触——葛藤（衝突と競争）——同化（統合と心理的葛藤）といった人間と環境との生態学的分析は、デュルケムとは違って二層（二重）構造を想起させる。例えば、「都市」の中には、都市の集会的表現と共同体的表現、人工的事実と自然的居住地、物理的組織と道徳的組織、間接的・第二次的関係と直接的・第一次的関係などの二分法が発見できる。そして、かかる二層構造は、とりわけ彼が「近隣」（the neighborhood）について詳細に触れるなかで明確になる。

彼は、コロニーと隔離地域（colonies and segregated areas）に触れて、以下の通り述べている。

都市環境のなかで、近隣は、より単純で未開の社会形態において保持していた多くの意義を失ってきている。コミュニケーションや交通手段が容易になることで、近隣の永続性や親密性は、破壊されてきた。というのも、かかる諸手段が容易になることによって、いくつかの異なった世界に自分たちの注意を払い、同時にそうした世界に住むことが可能になるから。

しかし、それ以上に、同じ人種や同じ職業の人々が隔離された集団のなかで共に居住しているところでは、近隣の感情は人種の敵対意識や階級利害と融合しがちである。

このように、都市の近隣の基礎的性格とその変化に触れつつ、なお近隣の内部に、歴史過程がいろいろと維持され、過去が現在のなかに出現していること、そして、多かれ少なかれ生活や利害をとりまく一層大きな圏域とは無関係に、ローカルな地域それぞれの生活は、地域独自の惰性（momentum）にしたがって進行していく、ことを強調する。

パークが「マージナル・マンと文明化（civilization）」に強い関心を寄せるのも、かかる二層構造と無関係ではない。彼の「文明のカタストロフィー理論」（catastrophic theory of civilization、これはイングランドのヒュームやフランスのテュルゴーにまで遡れる。パークは「進歩のカタストロフィー理論」と読みかえもする。）に従えば、文明は、コンタクトとコミュニケーションの結果であり、人々が競争とコンフリクトさらに協同という実り豊かな諸過程のなかで共住することの結果なのである。移住そしてそれに付随する人々や文化の間の衝突やコンフリクトや融合といった諸過程が、パークの緊急の関心事なのである。彼の思考の軌跡は的確である。

あらゆる革命が、あらゆる啓蒙が、さらに一切の知的覚醒やルネッサンスが、人々が侵入したり、ある他国の為政者が文化を強要したりすることによって引き起こされてきたが、これからもそうであろうとするのは、どうかと思われる。通商やコミュニケーションの発達している今日、このような見解は修正される必要があるだろう。通商[の発達]は、地球の一体性の終局をもたらしつつ、移動すること（旅）を安全なものにする。さらに、機械工業の発達と都市化は、世界を循環するのが人間でなくて、商品であることを明らかにした。カバンに荷物を詰め込んで移動した旅商人は、セールスマンにとってかわった。世界経済（world-economy）と人々の世界移動＝移住が一層進行していく。

そして、このプロセスは、パークに言わせれば「社会の世俗化と人間の個別化との二局面」（dual aspects as the secularization of society and the individuation of the person）ということになる。貿易と通商の拡大、人々のさらなる移動（移住）、人種や文化の融解、大都市の出現といったこれらのものは、ローカルな紐帯を緩め、部族の文化を破壊し、ローカルな忠誠にかわって都市の自由をもたらした。すなわち、部族の聖なる慣習に替わって、文明という合理的組織が登場することになった。

さて、パークが「偉大なさすらい人」（great wanderers）と呼ぶマージナル・マンの範型は、当時のユダヤ人のゲットーと彼らが居住するより大きなコミュニティとの関係の中に

見いだされる。

ユダヤ人は二つの文化および二つの社会の境界に位置している。そして、これら二つのものは相互浸透的でも融解できるものでもない。解放されたユダヤ人こそ、歴史的にも典型としてもマージナル・マンであり、世界で初めてのコスモポリタンであって市民である。ジンメルが『社会学』のなかで深い洞察と理解に基づいてそう呼んだように、異邦人 (der Fremde) なのである。

パークは、アメリカの自由で複雑な都市社会に生きる移住者のコスモポリタンの生活の中に、ユダヤ人と同様の同化 (assimilation) のプロセスを見る。そして、この同化のプロセスは、分割された自我の間の、古い自我と新しい自我との間の、文化間コンフリクトの結果であり、それは決して満足をもたらすことのないテーマであるが故に、深い幻滅 (profound disillusionment) へと導かれるものと言う。「ゲッターの中での暖かい安全」と「外部世界の冷たい自由」との「二つの世界」に生きるマージナル・マンのマインドに、パークは文明化と進歩のプロセスを見いだそうとする。

2. 2 ワースとアーバニズム

論文「コミュニティ・ロスト」で、ライツ夫妻 (Reitzes Donald/Reitzes Dietrich) は、「近隣は単なる地理的領域以上のもので、特有の人口、社会制度や組織の体制、一連の感情や伝統さらに歴史から構成される」と述べ、さらに、「近隣は、無規制で無計画な共生的性格をもつパッチワークな自然的地域であり、ゲゼルシャフトの大海のなかのゲマインシャフトの小島」とすることで、パーク同様に、コミュニティの二層構造を指摘する。同時に、ライツ夫妻は、ワースのアーバニズムの主張には、少なくとも二つの点でパークの都市生態学から後退している側面を指摘しうる、と言う。

まず第一に、パークは「都市」の抽象的で理念化された理論的陳述にとどまらず、都市内部に見られる内部組織や多様な自然的地域に焦点を合わせる。[それに対して] ワースの仮説は、一般化した「都市」の記述に戻っており、また都市の社会構造や行動に特徴的な異質性についてパークの認識には劣っている。第二に、パークは体系的な理論を提供した。彼は、都市の内部構造に意味のある共生的なプロセス、および人口特性や社会組織さらに社会的感情をまで検証している。こうしたものは、個々の近隣関係を維持したり、地域 (localities) をより大きな都市的広がりをもった諸制度に結びつけるのに貢献している。[それに対して] ワースの仮説は、かなり断片的で関連のないものとなっている。ワースの「理論」は、知的かつ概念的な要因分析によっ

て構成されており、その際、まずテンニエス、デュルケム、ウェーバー、ジンメルそしてパークといった研究者のさまざまなテーマがいったん集められ、そこから人口量や人口密度や異質性といったものの効果 (effects) を測定するために、これらのテーマが識別される。アーバニズム理論は、本質意志とゲマインシャフト (Wesenswille und Gemeinschaft)、有機的連帯と分業、貨幣経済と客観性といった [説明にみられるような] 社会のプロセスに関する首尾一貫した明瞭な関係 (set) を欠いている。とりわけ、このような関係は、都市の形態や外観、そして都市的行動を作りだすものなのに。逆にワースは、アーバニズムを語る際、近隣関係の意義が衰退していき、ローカルな愛着や結合の度合いが減少していく、と見ている。

ワースの社会学でもっとも周知の理解は、アーバニズムの理論であり、それは、都市のサイズ (規模)、密度、異質性といった概念を変数として、都市の社会的・心理的効果を測定するものである。ジンメルが19世紀末のベルリンを舞台に、「大都市と精神生活」で、貨幣と客観性という構造とかかわらせて抽出した社会心理的現象を、ワースは大量消費型生活様式が支配するシカゴを実験室として、社会解体論のパースペクティブで再現してみた。

匿名性、打算性、孤立、疎外、不安感、非人格性、アノミー、神経的刺激など、彼が導きだす都市の人々の適応様式、および第一次的人間関係 (近隣関係) の衰退についての彼の主張は、後にさまざまな批判を受けることになる。

ところで、ワースのアーバニズムに関するライツ夫妻の先の指摘は、間違っていないし、ワースのアーバニズム (Urbanism as a Way of Life) についてこれ以上語ることの意義は何もない。という事で、ここではコミュニティとの関連でワースに言及しておこう。本稿では、ゲットー (The Ghetto) を材料にする。この論文は1927年の A.J.S. の雑誌論文で、アーバニズムの論文 (1938) より11年も前、彼が30歳の時のものである。

ゲットーは、ユダヤ人を他のヨーロッパ人から隔離することになる中世ヨーロッパの都市制度から始まって、現代 (当時) の西欧世界でのユダヤ人の移住セツルメント (immigrant settlement) にいたるまでを、孤立と適応の事例研究として論考し、同時に、都市生活の中でのローカル・コミュニティの形成と発展のプロセスと関連づけて追跡していく。すなわち、歴史的な展開や東方と西方でのゲットーの比較といった言及はともかく、この論文の今日的意義は、ユダヤ人の内的世界とより広い外部世界との融合として、一般化したコミュニティのレベルでゲットーを扱っている点にある。生態学的把握からすれば、ゲットーは、都市コミュニティにおける人口の配分とグルーピングのプロセスによるものである。そうすることで、コミュニティは、コミュニティ自体の統合と連続性を維持しうるのである。都市にあるリトル・シシリー、リトル・ポーランド、チャイナタウン、

ブラック・ベルトといった国別のコミュニティ、ボヘミア(芸術家集団)、ホボヘミア(浮浪者集団)、スラム、悪所(vice areas)、繁華街(rialtos)といったコミュニティまで、これらは、人口の配分とグルーピングの結果である。

さすらい人(stranger)であるユダヤ人の居住地であるゲッターは、一時的な停泊地(stopping-place)かもしれないが、彼らは浮浪者ではない。というのも、彼らは、目標と目的地を持っており、そのコミュニティは、移住するそれぞれの目的地でユダヤ人を包みこむ。

ユダヤ人が外部の世界と接触する時には、一般にカテゴライズされ理念化された傾向にあるが、自分たちのコミュニティにいる時は、彼らは非常にくつろいでいた。コミュニティの中では、彼らはエチケットや形式主義にこだわる必要はなかったように思える。仲間のユダヤ人たちと接触する場合には、暖かで親密な自由の雰囲気であった。特に、家族生活に関してこのことは言える。

ワースは、このようにコミュニティ内部での親密な連帯関係を描きつつ、他方でコミュニティの外部世界での緊張状態を指摘している。

ゲッターはユダヤ人を自己意識的にする。たいていのユダヤ人にとって自分たちの外部には単に通りすがりの眼差しでは済まさないような広い異質な世界が現存しているが故に、ゲッターの内での生活は、我慢しうるものであった。その結果、彼らは二つの世界の周辺(fringe)で生活することになった。

この「二つの世界の周辺」に関してひとこと触れておきたい。ワースの場合、パークの「二層化したコミュニティ」とは違って、ゲッターの内部がコミュニティであり、それは「厳密により広い外部世界から分離された」、「閉鎖的コミュニティと呼んでよい、同系繁殖型の永続集団」(inbreeding, self-perpetuating group)なのである。

ゲッター・コミュニティでの精神的連帯は、いつも家族生活の紐帯に基礎づけられていた。シナゴグ内での組織にしたがって、家族はそれぞれコミュニティ内での地位を得ていた。…ゲッター・コミュニティは、細かく限定化(専門化)されており強く統合されてもいた。

しかし、パークは異なった説明をする。彼は、ドイツ人であることとユダヤ人であることとの忠誠心のコンフリクトに引き裂かれるハイネ(Heinrich Heine)を例に語る。

彼 [ハイネ] 晩年の自伝によれば、状況が彼を二つの世界（しかも、そのいずれの世界にも属しえない）に住むように強要させたこと、ここにハイネの秘密と悲劇が潜んでいた。彼の精神生活を不幸に陥れ、「魂の不安」とも言えるような精神的コンフリクトと不安定さを彼の作品に付加したのは、まさにここに因がある。

パークの stranger は、コミュニティの内と外の周辺でマージナル・マンなのではない。コミュニティの内部（ゲッターと近隣）でそうなのである。「彼 [マージナル・マン] は雑種 (mixed blood) であり、…そのいずれにおいても stranger であるような二つの世界の人間である」。パークとワースのコミュニティ解釈の違いには、私たちはもっと注意を払ってよい。

3 近隣の再発見と二つの世界

——public と private——

3. 1 アーバニズム論批判

(1) アメリカの都市社会学

ワースのアーバニズム論は、1950年代以降の都市研究ブームの中で、集中砲火をあびることになる。それは都市構造の研究か産業社会の研究か、近隣にみる第一次的接触は衰退したのか、生態的要因による生活様式の研究で十分か、経済的ならびに階級的分析が欠けているのでは、さらにはワースが研究対象とするコミュニティの妥当性に関してまで、さまざまな批判が、著書や学術雑誌を彩ることになる。本稿では、ガンス (Gans, H.J.) とアクセルロッド (Axelrod, M.) を紹介する。

ガンスは、論文 (1962) で、都市や都市生活を研究する今日の社会学者の多くが、シカゴ学派の業績とりわけワースの「生活様式としてのアーバニズム」での展開に追随しているが、60年代のアメリカ社会ではワースの主張が古くさいものとなっていることを強調する。(こうした指摘は、ファーバー (Fava, S.F.) やグリーア (Greer, S.) の論文にも見られる)。

この論文で、ワースは「都市に関する最低限の社会学的定義」として、「社会的に異質な諸個人からなる、相対的に大きな、密度の高い永住的なセツルメント」を考える。こうした前提の上で、彼は、都市的生活様式の概略を導き出す。[都市では] 規模 (number)、密度 (density)、異質性 (heterogeneity) がその社会の構造を作り出す。かかる構造の中で、第一次的集団関係は、必然的に第二次的接触に取って代ら

れる。例えば、非人格的、断片的、表面的、一時的、時には収奪的（predatory）な特性に。その結果、都市の居住者は、匿名的で、孤立的で、世俗的で、相対的で、合理的で、詭弁的で、といった特徴を有することになる。…この結果、都市居住者は、農村や前産業社会でのセツルメントによく見られる第一次的集団や統合された生活様式を喪失していく。

しかし、60年代になると白人居住者の郊外への移動や産業の地方分散など、アメリカ社会での急激な変動が一般的になる。ワースの学説も修正を余儀なくされる。

ガンスには、ワースの主張が都市社会（city）を扱うというよりは、むしろ都会的－産業型社会（urban-industrial society）を対象にしている点で、看板に偽りありと映る。ワースは、他の都市社会学者同様にセツルメントのタイプの比較分析に関心をもっているようで、実は都市と農村の比較ではなくて、都市社会を民俗社会（folk society）と対置させているのである。かくて、「彼は、前産業社会と産業社会とのセツルメントの類型を比較している」のである、と。

[今日では] あらゆる社会が都市化しているのに、ワースの分析からすれば、都市の生活様式と「現代社会の内部に存する他のセツルメントにおける生活様式」とを区別することが不可能である。ワースの時代には、都会と前都会のセツルメントを比較することで実り豊かであったかもしれないが、今日では、コミュニティ社会学にとっての第一の課題は、さまざまなセツルメントのタイプの間に発見できる類似性と差異とを分析することのように、私には思える。

巨大都市、都市、郊外、開放的な田舎、インナー・シティ、アウター・シティなど、セツルメントのタイプは、多様である。規模、密度、異質性から帰結する都市生活の特質として、ワースは、二つの要点を挙げている。第一に、小さな空間に多様な人々が群れ住むことで、同質的な人々が分離されて近隣を形成するようになること。第二に、都市居住者の間の物理的距離が短縮されることによって、社会的な接触の機会が増加するが、この接触機会の増加は、既存の社会的文化的パターンを崩壊させ、同化と文化変容を促進させる一るつば効果（melting pot effect）一ことになる。テンニエスの *Gesellschaft* を想起させる。彼のかかる指摘も、彼が主として対象としたのがシカゴのインナー・シティであるユダヤ人の近隣からなるマックスウエル・ストリート（Maxwell Street）のゲットーであったことから理解できよう。当時、このゲットーでの近隣関係は、ユダヤ人居住者の移動と文化変容とによって分散せざるをえない状況にあった。

ガンスは、ワースによるゲゼルシャフトとしての都市の診断に、3点で疑問を呈する。

第一に、インナー・シティ研究から導きだされた結論は、都市全域には一般化しえないこと、第二に、人口の規模や密度さらに異質性が、ワースが提案するような社会的帰結をもたらすかどうかは、確かなところ、まだ立証するに十分でないこと、第三に、かりに因果関係が確証できるとしても、都市住人はさまざまな社会構造や文化パターンを背景にしており、また都市で生活することでかかる構造やパターンを多様に発展させてきているので、ワースの言う帰結とは関係がないのではないかと。ガンスは、インナー・シティの居住者の5つのタイプを挙げ、「心のよりどころ—社会的、文化的に—」(social and cultural moorings)となる感情が、それぞれにインナー・シティに潜んでいることを実証する。①学生・画家・ミュージシャン・エンターテナー・作家などの知的・専門的コスモポリタン、②一時的か生涯にわたっての未婚者や子無し、③エスニックの田舎者、④貧困者、⑤奈落者や社会・経済的転落者。①と②は、自分たちの選択意志でそこに住んでおり、③は必要に迫られてそうしている。④と⑤については、いかなる選択も働かない。

ガンスによれば、確かにこれらの五通りの人々は、密で異質な環境の中で生活してはいるが、それぞれに異なった生活様式に従っており、密度と異質性が共通して機能しているかどうかを理解するのは、困難である。特に、④と⑤を除いて、これらの住民は、そもそも近隣関係とは無関係な存在であり、①と②は自分の意志で近隣やローカル・コミュニティと関係を持たないことを望んでいる。④と⑤は、ある程度規模、密度、異質性の結果に影響を受けているように思えるが、貧困者が過度の密集に悩む根拠は、彼らの低所得と人種差別それにもろもろのハンディキャップの影響であって、都市の生態学的構成の必然的な結果とは考えられない。彼らには居住の選択は保証されず、近隣の中に交じって生活するのは自分たちの選択でない、ある種の強制によるものである。ガンスは、語る。

ワースのアーバニズム概念の社会的特徴は、結局、人口規模や密度さらに異質性などの結果というよりは、むしろ居住の不安定さ (residential instability) の結果と考えたほうがよい。事実、異質性は、居住の不安定さから結果しており、… それは、あらゆるセツルメントに見いだすことができる。この不安定さは、どこにでも同様に表れる。だから、都市の生活様式であると言うことは出来ない。

そして、都市の社会学的定義を試みる場合、生態学的アプローチでなく、階級やライフ・サイクルの各段階ごとの分析こそ必要であると締めくくる。

アクセルロッドは、論文 (1956) において、デトロイト地域の住民を対象に、フォーマルで第二次的集団とインフォーマル集団への参加の実態分析を通して、ワースのアーバニズム論を検討している。まず彼は、アーバニズムと集団参加との関係で、二様の見解を社会学の文献に見る。一つは伝統的な見解で、都市コミュニティに、非人格的關係やフォー

マルで第二次的集団の重要性、そして親族集団の衰退を強調する見解。これは社会学の「シカゴ学派」に特徴的とする。第二の新しい見解として、インフォーマル集団間の接触により重きをおく立場。伝統的な見解では、家族や拡大親族集団にある限られた役割だけをみるのに対して、新しい見解では、家族役割の変化が強調される。こうした異なる見解になんらかの回答を与えることが、特殊にコミュニティ組織の一層の理解のために、また一般的には社会組織の理解のために必要である、と言う。

調査の内容を追っていくのは煩雑になるので、ここでは調査結果を通じて本稿と関連するところだけを指摘する。アクセルロッドの formal group ないし formal organization についての定義は、voluntary association と同じで、1937年に出版されたレポートの次の内容に拠っている。

voluntary association については、このレポートで以下の諸集団を指す。それは(public な組織や行政団体とは区別された) private なもので、しかも(個人が生まれたところの家族、教会そして国家といった involuntary な構成物とは異なって)個人の選択に基づいて入会する諸集団。voluntary association なる用語は、本レポートでは、結局、非営利の voluntary association に限られる。だから、利益を生み出すような協働団体や組合(partnership)は含まない。という事から、ここでは、友愛クラブ(fratern al orders)、市民および社会改良協会(civic and reform society)、非営利の協働組合、労働組合、同業団体、青年団体、レクリエーションおよび余暇活用グループなどが該当する。(ワシントン D.C. のアーバニズム委員会から国民資源委員会に提出のレポート、『都市、国民経済における都市の役割』1937年6月)。

名目だけの参加者から積極的な参加者にいたるまで、フォーマル集団への参加者は約63%となり、約3分の1はいずれの集団へも参加していない。参加者の半数はただ一つの集団に参加しているだけである。さらに、参加の程度は、下位集団によって異なる。家族収入と教育年数では、高くなるにつれて会員である割合も高くなり、世帯主の職業では事務職や販売職、専門職や経営者や所有者で高く、職工や職人で低くなっている。積極的な参加者の比率でも、同様のことが指摘できる。「収入、職業そして教育などに関連する社会的地位は、社会構造上の個人の権力的位置の指標と思われる。高い地位にある人々は、自分の位置を保持するために、当該の組織内での類似した位置にある人々と仲間になろうとする。…工場労働者の場合、一日の仕事が終了すると、仕事のことは忘れてしまうのに対して、専門職や管理職の人にとっては、自分の仕事と仕事外の活動との分岐線は明瞭ではない」。

インフォーマル集団への参加の主たる機能は、人々の間に凝集的で共同の価値を創りだ

すことにある。人は、さまざまな社会—経済的役割と結びついた固有の専門化した役割行動を通じて社会に入りこみ、統合的な機能を果たしているが（第二次集団への参加）、これとは別に、

社会にはすべての人々に関わる共通の規範があり、それが私たちの行動を規制している。それは、[先に挙げたフォーマル集団のような] ある限定された部分的なものではない。言ってみれば、それは、所与の社会のすべてのメンバーが『共通の礼儀』（common decency）やエチケットとして共有しているルール、標準、規範そして行為なのである。このような規範の重要な根拠は、家族や仲間集団といった親密なインフォーマル集団にある。

インフォーマル集団への交際頻度（親族、友人、近隣の人、職場の同僚のそれぞれに対して）の質問から、親族（自分の家族は除く）との関係がもっとも高くなっている。この点は、都市住民にあっては親族との交際頻度は弱くなってきているとのステレオタイプ化された言説と対立する、とアクセルロッドは言う。詳細は避けるが、インフォーマル集団の類型別では、重要性との関連で親族が第1位で、次いで友人、近隣の人、職場の同僚の順となる。

これは、人口のどのような階層についても言える。社会的地位（尺度に関しては略。彼の論文を参照のこと）、家族収入、教育年数のそれぞれについて、親族との交際頻度が高くなっている（ただし、最高位の 카테고리では、友人との交際頻度が高くなる。しかし、いずれの 카테고리においても、50から74%の人々が親族と頻繁に交際している）。

都市社会学者のある学派は親族関係の衰退を強調してきているが、それは、ここで [この論文で] 展開してきた事実とは矛盾した傾向を誇張している、という事が明らかである。

さて、アクセルロッドは、アーバニズムの様相が、都市住民人口の社会—経済的階層によって異なっていること、そして、都市化が第一次的でインフォーマルな集団を衰退させ、集団参加の意欲を喪失させる、とのワースの主張が誇張であることを指摘する。

ここでは、ガンズとアクセルロッドを取り上げたが、ワースのアーバニズム批判は、アメリカの都市社会学研究にあっては概してこれらと同様の傾向にある。

（2） メラーとカステル

イギリスの都市社会学者のメラー（Mellor Rosemary, 1975）は、コミュニティに関するアーバニズム理論は狭く限定されたものでしかなく、「コミュニティは諸資源に対するさ

まざまに異なった接近の仕方によって定義される必要がある」として、「経験に基づく直接的な脈絡」(immediate context of experience、アーバニズム論に特徴的——筆者)を離れて、全体としての社会の構造変動から出発すべき、と主張する。

大抵の都市社会学者は、今では、「アーバニズム」や「都市化」(urbanization)といった用語が説明するに不適當なものでしかない事に気付いている。しかも、社会学の分析カテゴリーとしてこれらの用語を使用しても、イデオロギー的推論でしかありえないことも。

都市社会学は、20世紀の始めにヨーロッパ社会学をアメリカの諸大学のコンテクストの中に翻訳することから誕生した。それは、[一方で]社会ダーウイニズムやプラグマティズムの思想や仮説と[他方での]テンニエス、ジンメル、ウェーバーやデュルケムの社会学とを異種交配させるものであり、シカゴの地でスモール、トーマスそしてパークの指導のもとでなされたのである。…この[シカゴ]学派のアプローチの内、次の3点が我々の気になるところである。i. 準拠枠として、都市とアーバニズムが取り上げられる。ii. 田舎(country)と都市(city)、農村的なもの(rural)と都市的なもの(urban)との二元論が認められる。都市がその後背地[農村]を支配していることは明瞭であるにもかかわらず、この二つのものは基本的に異なった文化すなわち二つの生活様式と考えられている。iii. 都市は、「それ自身の法則によって作られた空間の中に、外部から組織化された単位」(Park, 1915)として概念化された。…このように狭く定義されたアカデミックな学問としての都市社会学は、権力の問題や資源の欠乏の問題を除外してしまうだけでなく、「社会的なもの」を、「コミュニカルなもの」とか「パーソナル」なものにすり替えてしまひもする。…結果として、都市社会学の領域は、「コミュニティ」の研究に限定され、「コミュニティ」は、女性と子供の世界になってしまった。

若干長い引用になったが、メラーのアーバニズム論への批判は、以上で尽きる。彼の論文の後半は、イギリスの都市社会学の現状と課題の展開である。コミュニティ研究が、近隣や家庭生活を対象とする狭い方向から、コミュニティ内での資源の配分、その結果としての紛争(不均等な資源配分)のテーマへと転回すること(施設の利用にしても、諸資源の配分の不均等によって、接近可能性に差が生じてくる)の必要性が、語られる。最後に、メトロポリス、都市、コミュニティの関係が、しばしばメトロポリスの資源による地域統制(支配)の結果としての矛盾の関係であることを指摘する。コミュニティ研究の今日的課題は、この矛盾が個々のコミュニティで異なって出現しているが故に、コミュニティの

比較研究を遂行することにある、と結ぶ。

メラーによれば、都市社会学は、都市化をいまだ達成していない「都市化」社会を対象にし、しかも全体社会はどこでも一様に社会化されているわけではないので、コミュニティも収奪（expropriation）と集権化による矛盾をさまざまに経験することになる。ここに至って、「アーバニズム」は、メトロポリスの文化と見做され、それに対して「ルーラリズム」（ruralism）は、民俗的でも農村的でもなく、「地方主義」（provincialism）と関わって、メトロポリス型の生活からの分離や排除と考えられる。全体社会と現代都市そしてコミュニティにおける重層化した問題提起が、ここにはある。

次に、カステル（Castells, M., 1975）を垣間みておこう。彼は、都市の構造的矛盾、都市の危機といった視点から、アメリカ都市社会学の限界を指摘しつつ、かかる批判を通じてフランスを始めとするヨーロッパの社会学とアメリカ社会学との交流を意図する。彼の主張の根底には、およそ「都市」社会学なるものが存在しうるのか、との疑念が潜んでいる。

都市的諸問題の重要性が、日常生活の中でも政策の立案過程の中でもますます高まってきたというのに、都市社会学においては、以前にもましてこれらの問題に科学的に応答することが困難になってきた。つまり都市社会学は、諸問題を記述することはできるのだが、その発生諸過程までは「説明」することができない、という状況に陥っている。…その本質的な原因は、都市社会学が科学的な専門領域でもなければ一般観察領域でもなく、むしろイデオロギーの所産にすぎないという事実求められる。

カステルによれば、社会の形態変化と都市への新たな視点は次の諸点に求められる。先進資本主義社会の経済は消費過程に強く依存しており、問題は剰余価値の実現のレベルないし市場の拡大の中に存在している。生産手段と管理諸単位の社会的・空間的集中は、人口と分配諸過程の相互依存性の増大と集中をもたらす。消費諸過程は共同消費施設を基点に組織化が進み、かかる諸施設が居住空間の構造を決定し、都市の構造を決定する。ここに、一連の新しい社会的矛盾が、消費過程のレベルとくに共同消費過程のレベルに出現してくる。この矛盾をめぐって、都市の社会運動が諸社会階層に影響を強めてくる。公的権力による共同消費手段の管理が一般化するにつれて、都市への視点は政治的色彩を濃くしていく。病院、学校、住宅、交通などの各組織は、緊密な結合と相互依存のネットワークを形成し、…社会構造を形成する階級的な諸利害と結びついた政治的な選択の対象になる。国家は、空間の編成を通じて、日常生活の真の支配者になる、と。

かかる都市への理解と、規模や密度や異質性から空間的分離（隔離）を導くアーバニズ

ム論との間の接合のチャンスを発見するのは、非常に困難である。都市的生活様式が他の（例えば農村的）生活様式とどのように異なるのかを、セツトルメントの差異との関連で検討していく視点は、ここには見られない。彼にとっては、都市的地域と農村的地域（漁村、山村も含めて）とを総合する、階級的に編成された現代資本主義的な社会構造をまず前提として、次に共同消費財の支配・管理の集中化と構造的矛盾の問題を検討することこそ、重要なのである。

しかし、本稿では、一見相容れないように見える二つの主張を、コミュニティのレベルで接合できないものか、検討してみたい。最終章で考察する。

3. 2 コミュニティ解放説とネットワーク論

1970年代、アーバニズム論に基づくシカゴ学派の都市社会学は、前節で見てきたように激しい批判を受け、その中で新たな方向が探られることになる。ここでは、近隣の再発見とかネットワーク的コミュニティ（community as network）と特徴づけられる新しい傾向を取り上げる。それは、都市化がコミュニティの紐帯を浸食する、とのワースの仮説の検討から出発する。代表例として、ウエルマン（Wellman, B., 1979）およびローガンとスピッツ（Logan J.R. and Spitze G.D., 1994）を紹介する。

（1） コミュニティの争点

ウエルマンは、「コミュニティの争点」で、このテーマが今日の社会学のほとんどの分野で議論の中核になっており、ラージスケールの社会システムでの分業の発達、第一次的紐帯（primary ties）の組織や内容にいかなる効果を及ぼしているのか、を検討する。すなわち、産業化や官僚制化が第一次的紐帯—例えば、近隣、親族、利害集団、職場—に及ぼす影響を測定することに、関心をもっている。

- i. 国民国家の活動分野がますます増大するにつれて、他方でローカルなコミュニティの自律性や連帯が低下していく；
- ii. 生産や再生産に関して、きわめて道具的な官僚制度が発達してきている；
- iii. 都市の大規模な成長につれて、多様な利害集団を維持するための人口上・組織上の可能性が増大してきている；
- iv. （たとえ空間的密度は低下しているところでも）、分節化した人々を結びつける社会的な相互行為の密度はたかまっている；
- v. 高度の流動性のもとで、都市の多様な住民がお互いに接触を維持しようとしている；
- vi. 非常に簡単に、かなり遠く離れていても接触を可能にさせるべく、安価で効果的な輸送機関（施設）の広範なネットワークが形成されている。

このように整理をしながら、コミュニティ分析の現状に混乱の生じていることを指摘する。それは、地域性ないし規範性をめぐる問題である。これまで触れてきたように、マッ

キーバーはコミュニティを地域性と地域感情(コミュニティ・センチメント)から把握し、特に地域の総体性を重視していた。ヒラリー(1955)は、地域性、社会的相互行為、共同紐帯の3つのキー・コンセプトを諸文献の整理から導きだす。バーナード(1973)によると、ザ・コミュニティとコミュニティを区別して、前者を「地域性が基礎的構成要因とみなされる居住地区」に、後者を「三つの構成要因のうち、共同紐帯および社会的相互行為」にみる。彼女の場合、地域性と社会的相互行為や共同紐帯とが区別される。いずれにせよ、地域性、社会的相互行為、共同紐帯が三点セットのように、コミュニティ概念に付きまっ

ている。ウエルマンは、従来のコミュニティ概念には、規範に基づく統合や合意の側面とローカルな局面における空間的分離のもとでの第一次的側面とが混同されていることを懸念する。かかる混同のもとでは、まず地域の境界の線引がなされ、その後で特定の地域内での社会的相互行為や感情が分析されることになる。例えば、都市居住者の第一次的接触は、何よりも地域性(locality)によって可能になる、という具合に。このような混同が存在するがゆえに、コミュニティ・クエスションは、しばしば地域の連帯の研究になってしまうのである。

地域を前提にして秩序づけられた連帯や感情が存在しない場合、コミュニティは崩壊していることになる。実際、ウエルマンは、今日頻繁に見られる住居の移動や分散したネットワークなどのもとで、かかる意味でのコミュニティは衰退している、と考えている。彼の関心は、地域性や規範性を重視することから、コミュニティ研究を解放することにある。そこで、提案されるのがネットワーク分析である。コミュニティのネットワーク分析は、彼によれば「個人と集合体との間の構造化された関係」に注目する分析である。規範的連帯でなく関係すなわち連関(linkage)が重要なのであり、その際の格好のテーマが親密性(intimacy)ということになる。

ウエルマンは、Lost(喪失)、Saved(残存)、Liberated(解放)の三つの説のそれぞれについて、コミュニティ概念の今日的妥当性を検討する。喪失説の立場では、第一次的紐帯(結合)は産業-官僚制社会の発達(分業の発達)によって喪失・崩壊するとされる。残存説では、「人間は生まれながらに社会的であり、常に共同体を組織化する傾向にある」ので、分業が発達しようとも、近隣や親戚関係に基づく連帯は維持される、とする。解放説では、第一次的関係の重要性を認めながらも、強固に結合した連帯によってコミュニティが組織されるとは考えない。むしろ、多数のネットワークが都市の社会関係の中に交差している。

彼は、イーストヨーク調査で「親密さの社会的基盤」を調べた結果、親族と友人に関して親密な結合が見られることを発見する。ただし、友人よりも親族関係(adult children, parents, sibling)にもとづく結合が強い。その意味では残存説(saved)に近いが、親族シス

テムが依然として効果を発揮しているわけではなく、かなり個別的になっている。多元的なネットワークが都市におけるコミュニケーションを特徴づけている。調査の分析結果から、彼は、残存説の名残を認めつつ、解放説を支持している。解放説を妥当とする根拠として、彼は次の5点を挙げる。

- i. 居住地や職場や親族集団が分離した結果、都市住民は、弱い連帯関係からなる多くの社会的ネットワークの中に包み込まれる；
- ii. 居住地の移動が激しくなるにつれて、従来からの結合は弱まり、強固で新たな結合は妨げられる；
- iii. 安価で効率的な輸送やコミュニケーションの手段によって、空間的距離にかかる社会的コストは減少し、広範な第一次的結合を容易にする；
- iv. 都市や国家の規模、密度、異質性が高くなるにつれて、相互行為を可能にする諸施設も広範囲なものとなり、緩やかに（loosely）編まれた多様な社会的ネットワークへの接近の可能性も増大する；
- v. 第一次的結合の散らばりが大きくなり、都市の異質性も高まってくることで、お互いが関係を結びあう都市住民が強固に連帯した社会的コミュニティの中に密に編みこまれる、ということは考えにくくなる。

ウエルマンは、拘束とか連帯に基づくものでなく、差異化された関係として、ネットワークを整理する。例えば、親族関係や近隣関係に焦点をあてる場合には、密なネットワーク、都市の人々が接触する関係では緩いネットワーク、と。そして、次のように結ぶ。

じかに関係をもっている人はみな、自分を通じてまた他のひとびととお互いに関係を結ぶ。個人はだれもユニークなパーソナル・ネットワークの中のひとりである。このように、連鎖と群からなる複雑なネットワークは、最終的には共通のネットワークの結節点を媒介にして繋がっていく。ネットワークの視点から分析された社会的連帯は、共通の社会化によって感情を共有するといった連帯とは違って、ネットワークのプロセスの中で調整された諸活動の結果、獲得されるものである。……かくて、解放的なネットワークは、社会システムの広範囲の変動の圧力に対応するために、第一次的結合を受動的に再調整する試みなのであるが、換言すれば、このネットワークは、今日の都市住民による積極的な対応とも言える。なぜなら、それは、さまざまに異なった社会組織上の分業のもとで、システムの諸資源への接近を可能にしたりコントロールしたりするのを容易にさせるものだから。

（2） 近隣家族

すでに述べたように、ワースには、「近代の都市生活にみる匿名性は、地方のコミュニティから人々を解放し、また都市化は、コミュニティの紐帯を浸食し親族関係の絆を弱め

る」との認識があった。しかし、ローガンとスピッツは、コミュニティ解放説の立場から、ワースなどとは反対に、コミュニティを友人関係や親族関係ネットワークの複合したシステムと考える。ワースでは、「都市の人口規模や密度の増大は、家族と友人のネットワークを弱め、コミュニティへの愛着をも弱める」ことになるが、彼らは、「居住が長くなればなるほど、おのずと地域のネットワークは拡大し、コミュニティへの愛着も可能となる」と言う。

ワースの「生活様式としてのアーバニズム」での見解では、近隣関係は、人々の社会生活においてその重要性を失っている、とされる。近代のメトロポリスの社会での匿名性が、ローカルなコミュニティによって前もって課される紐帯から人々を解放した、と言うわけである。この社会が異質性を強めることによって、人々は自分たちの共通利害にもとづいて社会的パートナーを選ぶことができるようになる。例えば、職場で、ボランティアな組織で、あるいは友人の友人を通じて。産業社会になると、距離（distance）は、人々の相互作用に対してその抑制力を弱める。人々は、日々の活動に際して、より広い領域をカバーできるし、電話〔今日では電子情報一筆者〕コミュニケーションによって遠くの人たちと接触をもつことが可能となる。かくて、社会的ネットワークは、地理的状况に左右されるものでなく、ウエルマンの用語を用いるなら、解放されたコミュニティとみなされる。

実際の調査（1988年、ニューヨーク州）を通じて、彼らは、近接性（propinquity）、居住の長さ、土地の所有、年少の子供の有無、結婚と出産などの因子が、社会的相互作用の親密性（接触頻度、接触方法で測定）と正の相関にあることを発見する。例えば、新しい世代や新居住者は時の経過とともに地域コミュニティの社会的ネットワークに自然と同化され、その意味で、居住の長さは、地域内の友人数、地域内の親族の数、コミュニティへの愛着度などを測定できる最良の指標となる。土地の所有は、コミュニティでの具体的な資源（物質的利害）であり、地域社会におけるネットワークへの参加を促すものとなる。結婚と出産に関しても、コミュニティへの住民の参加や愛着の源泉となる。

ローガンとスピッツは、40歳以上の成人した子供を対象とする調査からこのような結論を導きだす。さらに、調査は、近隣地区内で同居していない親と子の中で、日常的に直接的に接触（daily face-to-face contact）することのできる親の割合は51.5%であるが、2～10マイル離れると11.4%にまで下ることを明らかにする。いずれにしろ、近隣家族（family neighbors）は、近接性と血縁という伝統的な社会的結合の二つの因子を満たすものであり、近隣に親や既婚の子供（adult children）が存在していることが、近隣での社会的相互作用に非常に強い影響をはたすことになる。近隣家族を有している人がたとえ少数であ

ろうとも、そうした人は、コミュニティの社会的ネットワークの中で中心的な役割を遂行しているのである。

同様の指摘は、ヘルライン (Herlyn Ulfert, 1988) の主張からも伺うことができる。彼は、この論文で直接ネットワークを扱っているわけではないが、都市での生活世界の変化を生活スタイルの多様化 (Pluralisierung) と差異化 (Differenzierung) に見ている。この多様化と差異化は、生活過程における個人化というコンテキストの中で生じてくる。個人化は、もはや今日では新しい社会的現実ですらなくなっているが、彼によれば、個人化が社会化の様式 (Modus der Vergesellschaftung)、すなわち「制度」になっているところに、「新しさ」がある。彼は、個人化および制度化について語る。

人間の生涯は、あらかじめ確立している所与の構造から解放されて、開放的で選択的になってきている。だから、自己の一生は自分で決めることが可能である。家族を例にすれば、人は結婚するのか、いつ結婚するのか、同居するか、同居しても結婚はしないのか、結婚しても同居しないのか、子供をも産むのか産まないか、これらは個人にかかわる事柄である。

制度としての生活過程という場合、一方では、生活の持続的プロセス (構造によって規定された持続性という意味で) が規則化されていることであり、他方では [構造でなく個人の一筆者] 生活世界の領域が構造化されていることでもある。この生活世界にあっては、個人は自分自身で指向し、また行為を企図するのも可能である。

ヘルラインは、個人化と制度化のもとでネットワークを理解する。ネットワークは、多様な形態をとる核家族の間に張り巡らされ、大都市の生活世界の匿名的な環境の中で孤立する人々の社会的接触を可能にする点で、統合的役割を担っている。そして、社会的ネットワークのもつ拘束力 (統合力、Bindekraft) の程度や種類によって、彼は、親族関係 (Verwandtschaft) を知人 (Bekanntschaft) や近隣関係 (Nachbarschaft) から区別し、特に物質的援助 (Hilfen)、社会的世話 (Betreuungen)、感情的支援 (Zuwendungen) などの「互酬性の基本原則」 (Grundprinzip der Reziprozität) が必要とされる場合には、友人や近隣関係以上に、親族関係のネットワークが強く求められると言う。彼によれば、親族関係は人間にとって第一次的な社会装置 (Sozialausstattung) であり、多くの領域でのさまざまな諸関係も親族関係によって基礎づけられる場合が多い。その意味では、孤立した核家族 (しかも少子化で小規模化した) の存在が指摘される大都市のコミュニティでは、「拡大三世代家族」 (dispersen-Drei-Generationenfamilie) による核家族間の世代関係を基礎とするネットワークの実現も考えられてよい、と言う。

いずれにせよ、①平均寿命の延長によって、今日非常に多くの世代が同時に生存している、②結婚しない人、結婚しても子供をつくらない人、兄弟姉妹のいない子供一人家庭などが多くなり、親族関係のネットワークが小さくなっている、③既婚女性の就業が1900年から80年にかけて、約2倍（26.4%から48.3%へ）増加し、労働市場への彼女たちの参入は今後とも増えることが予測できる、④家族役割を遂行するには、日常活動において親族関係の資源に依存することが多くなってきている、といったドイツの事情から、ヘルラインは、親族が社会的ネットワークの触媒の機能を持っており、伝統的な社会の規準が弛緩してきていることから、これまで以上にやすらぎのある親族関係に依存せざるをえないのである。

3. 3 二層化した世界—public と private

シカゴ学派の創設者の一人であるパークについて、私は、彼がコンフリクトの統合的機能に気付いていたこと、そしてコミュニティを完結した閉鎖的システムとしてでなく、二層化したオープン・システムとして理解していたことを、すでに指摘しておいた。この「二層構造としてのコミュニティ」の指摘は、最近ではフィッシャー（Fischer, C.S., 1981）によって主張されている。そして、フィッシャーの論考の特異性は、コミュニティの喪失説や残存説のいずれかに加担するのではなく、ワースに見るコミュニティ喪失説とガンスらのコミュニティ残存説とを総合しようとするその方法にある。

(1) 喪失説と残存説の総合の試み

私は、この節でフィッシャーの論文（1975）を参考にして、都市社会学におけるフィッシャーの積極的な貢献を見ておこう。この論文は「アーバニズムの社会的効果は何か」との問いへの回答を試みたものであるが、従来はワースによって指摘されたように、社会解体と個人的アノミーをその効果として挙げるのが、生態学的アプローチの常識であった。先に詳述したように、他方ではガンスによるワース批判も存在しており、フィッシャーはこの論文で「私たちのよく知っているように、実際はこの二つの立場とは異なった問題を提起しており、だから第三の道（a third alternative）を必要としている」ことを論じたい、と筆を執る。

私が提起しようと考えている理論は、簡単に言えば、ワースが逸脱や解体として述べた効果をも含めて、都市の人口規模や密度から独自の効果を説明しうる、とするものである。が、かかる諸結果を導き出す際のプロセスは、ワースによって仮定されたものとは全く異なっている。都市における「逸脱や解体」の高い割合は、疎外や匿名性や非人格性といった要因によって説明されるものではなく、多数の人々の集合によって、[換言すれば] 正常な (viable) 非通念的下位文化 (unconventional subculture)

を維持するのに十分な「臨界質量」(critical masses)によって説明される。

この論文では、フィッシャーは若干奥歯にももの挟まった言い回しをしている。それは、非生態学的立場をまず肯定し、つづいて「しかし」と生態学的アプローチへの賛意を表明する、その筆法にある。ただシカゴ学派の「第三世代」(奥田道大1983)に属するフィッシャーにあっては、「シカゴ・スタイルに固執しない、まして『古きよき時代』のシカゴのロマン思考へと馳せる世代ではない」ようで、ワース派の理論(Wirthian Theory)と生態学的思考とを識別しようとしている。都市に住むことと非通念性との間には、広範な結びつきがあることを指摘した上で、次のように語る。

多くの文化の中で、さまざまな歴史時代を通じて、さらに種々に異なった規範との関連で、かかる結びつきを指摘できる。こうした関係の多くを説明するのに、非生態学的方法が適切であるかのように思える。都市住民の個人的傾向(年齢、民族、教育など)が、かなりの程度非通念性を生み出している。付け加えるに、それ以外にもさまざまなタイプの人々が都市に移住してくるし、そこでは、自己一選択[この意味については、パークを想起してほしい]によって、非通念性を指向する場合もある。…都市住民に見られる非通念性の多くは、どのように説明されうるのだろうか。かかる問題提起は、まさにわれわれの経験的認識にかかわる事柄である。ワース派の理論が、それを説明してくれる——ただし、ワース派の説明ではほとんど実証しえないが故に、疎外とアノミーの発生のプロセスをもっと別の方法で説明することによって。ここに至って、「非生態学的」と呼ばれるアプローチが、研究を遂行するのに一層支持されることになる——もちろん、都市の非通念性を説明するのに、それで十分だと言うわけではないが。この論文は、人口の規模と密度の変数をいま一度導入する理論の枠組みで——それは、ワースの立場とはまったく異なる方法だが——、先の問題の解決を企図している。

さて、前に進もう。彼は非通念性を説明する際のキータームである疎外とアノミーの概念に関して、1973年発表の論文で詳述している。この論文では、意味の検討だけでなく、大都市居住者において、人口規模と無力さ(powerlessness)の間にあまり相関のないこと、社会的孤立感(例えば、不信感)とは非常に弱いけれども関係のあること、を公的統計資料で明らかにしている。概念の詮索は、この原著論文にゆずることにする。

フィッシャーは、先の「臨界質量」のごとく人口の規模や密度と非通念性との関係に関心を寄せるが、都市化や産業化に伴う規模や密度の拡大にはあまり目をむけない。「単純な生態学的決定論(例えば、群衆化は人々の常態を狂わせる。[ワースの理論には、大衆

社会と社会解体というマクロな側面を指摘しうる])は、拒否する。社会的行為の源泉を、パーソナル・ライフの小さな環境 [コミュニティー筆者] の中に求めよう」(p. 1323)。そして、この小さな環境は、パークの「モザイク模様の世界」でもある。構造分化したコミュニティは、衰退していくのではなく、逆に統合されているわけでもない。伝統的なものと非伝統的なもの、通念性と非通念性、標準化した文化と下位文化などから指摘できる、コミュニティ次元での構造分化は、分化した構造の間だけでなく、それぞれ一方の構造の内部のさらなる分化を通じてコミュニティそれ自体を活性化させることになる。例えば、①人口の規模や密度を通じての下位文化の多様化と異質化、②下位文化それぞれの強化(下位文化の信念、価値、規範さらに慣習への愛着や効果の存在)と臨界質量による制度の完備、③標準的文化と下位文化との間の、下位文化相互の間の相違の明確化とコンフリクト=文化の衝突 (culture clash)、④下位文化の普及 (diffusion) の激化 (普及とは、ある下位文化のメンバーによる他の下位文化の信念や行動の採用の謂)、⑤以上の結果として、非通念性の割合の高まり、といったプロセスを通じて。

「凝集性や一体感」は分化とコンフリクトを通じて可能になるとのフィッシャーの主張に、私は「社会のコンフリクト理論」との親和性を見いだす。この点については、第4章で展開したい。この節では、いま少しフィッシャーの下位文化理論に内在する積極的な貢献に目を向けよう。彼の次の言説は重要である。

私がここで展開しているモデルからすれば、都市の非通念性が示す形態は、特定の社会にみられる規範の関数であり、不意に表れる都市固有の下位文化の関数でもある。言いたいのは、「都市の非通念性に関してどんな普遍的な方向性も存在しない」(原文ではイタリック) という事である。都市が合理主義、世俗主義、普遍主義といった方向に偏りがちなのは何故なのか、との疑問に対する先験的な理由などどこにもない。確かに、ワースの理論からすれば別だが。都市は、様式化された標準とは異なった [存在] だとのみ言っておけばよい。

このように述べて、「都市の実態は、何ら確定されたものでなく様々に異なっている」(content-free differences) ことの事例を取り上げる。事例については省略するが、彼が「様式化された標準から異なった存在」とか「確定されず異なっている」との言い回しで説明する「都市の非通念性」とは、都市がオープンで不確定な存在であることを指している。「都市とは、非通念的なアイデアが花開く場所」なのである。彼にとってのアーバニズムの特質は、「不断に革新と変動をはぐくむ」ところにある。

都市での生活を十分に理解するためには、生態学的要因と下位文化の発達、さらに

その普及とをひとつの動的なモデルへと組み込むことが必要となる。こうして出来上がった理論は、コミュニティの「道德秩序」(moral order) に関してひとつの貴重な問いを投げかける。ここで提示している分析では、大都市は、市民が共通の「社会的世界」を共有することで統合されているのでもなく、またアノミーな「大衆社会」に特徴的なフォーマルな手段によって統合されているのでもない、ということを示している。一体、都市はいかにして統合されているのか。ある程度(to some extent)、統合されていない、と思える。例えば、大都市は小さなコミュニティに比べて、価値の合意は非常に少ない。[大都市では] 全員一致(unanimity)よりはむしろ、対立する諸意見(multinimity)が一般的である。統合が存在するなら、それは、都市のさまざまな下位文化間の交換や交渉そしてコンフリクトによって可能になる。…ここで提示している理論は、都市の「悪」(evil)と「善」(good)を同時に説明している。犯罪に係る非通念性と革新(芸術的)に係る非通念性とは、ともに相互に反響しあう力強い下位文化によって培われる。あまり喜ばしいことではないかも知れないが、結論は、後者の成就是前者なしには困難だと言う事である。なぜなら、この二つは、同じ力学(dynamics)から結果するのだから。

フィッシャーの以上の主張は、この節の表題に挙げた「コミュニティ喪失説と残存説の総合の企図」(例えば、ワースとガンスを)だけでなく、ダーレンドルフ(Dahrendorf,R.)の「自由で不確定な社会でのコンフリクト理論」との接合の問題として整理することができる。そうした点で、フィッシャーの試みは、都市の社会学を通じて現代社会の理論をも射程にのびた壮大な試みのひとつと考えてよい。

(2) 二層化した世界

フィッシャーが大都市とそこに包み込まれている小さな社会とを区別し、ワースがアーバニズムに見た都市の解体现象—無気力、孤立、不安など—は大都市においてはいくばくかの説得力を持っているとしても、小さな社会は逆に「相互に反響しあう力強い下位文化」(vibrant subcultures)による活力の場である、と指摘するのは、重要である。さらに、大都市の統合を、小さな社会における諸文化間(標準化された文化間、標準化された文化と下位文化の間、下位文化間)の交換、交渉、コンフリクトの結果であるとするのも、また重要な指摘である。彼が「コミュニティの『道德秩序』に関する重要な問い」への解として、サブ・カルチャー理論を提示したその背景には、この大都市とそこに包み込まれている「小さな社会」との重層的把握が存在していると、考えられる。そして、この視座はパークの「コミュニティの二層化」を想起させる。前述した通り、パークが、都市の集合的表現と共同体的表現、人工的事実と自然的居住地、物理的組織と道徳的組織など対概念で整理しようとしたのも、自然的地域(natural area)である近隣(the neighborhood)の秩序

が、これら対概念と関係する文化のコンタクトとコミュニケーション、競争とコンフリクトの結果であることを明確化する点にあったと思われる。

フィッシャーは、論文（1981）で、パークと同様にコミュニティにおける住民生活の二層性を明らかにしている。

アーバニズムは個人間の疎遠（*estrangement*）を生じさせる、との古典的理論は、アーバニズムのもとでは公的扶助が弱まり、社会的なコンフリクトが増加していくとの説を実証する限りで、説得力あるものとなる。しかし、この理論は、次のような反駁を受ける。住民があまり社会的な関係を維持したがないし、かなりの精神的ストレスで悩んでいるといったことと、アーバニズムとは何の関連もない、と。[むしろ]理論的には、このように考えた方がよい。すなわち、アーバニズムは、公的領域（*public sphere*）では「外部」集団（*foreign groups*）に対する恐怖と不信を生み出すが、私的な社会的世界（*private social worlds*）には何の影響も及ぼさない、と。アーバニズムは、近隣の間での不信とは何の関係もないが、より広いコミュニティでの「他人」（*other people*）への不信とは密接に関係をもっている。

ここには、コミュニティが、近隣の *private* な世界とより広い *public* な世界との二層から構成されることが、明示されている。そして、二層からなるコミュニティは、パークの言う *porous*（多孔的）であって、より広域的世界と常に浸透しあっている。だから、一方でのローカルなレベルでの連帯と他方での広範囲なレベルでの多様な関心とは、同じ個人が追い求める対象でもある。個人は近隣（小さな社会）という「教育的で第一次的集団」（*Reitzes D.D. and Reitzes D.C.*）から利益を得ると同時に、大都市の多様性や自由といったものからも利益を獲得することができる。

ここで、少し注意を促したい点がある。日本社会では、コミュニティはマッキーヴァーにならって地域の共同生活、完結性と統一、共同の土地そしてそこに成立する共同社会感情から構成されると捉えて、鈴木栄太郎の「第二社会地区」にそれを見ようとする場合がある。特に、日本の村落社会研究に根強い。そこでは、町内会や自治会の組織がコミュニティに相当する。他方、近隣については鈴木「第一社会地区」を考え、組や班などの組織を挙げる。こうした立場は、歴史的事実や行政の施策からも理解できる。

しかし、ここで検討している理論の誕生地であるアメリカ社会では、少し事情が異なる。例えば、バットン（*Button J.W.,1995*）は、アメリカ南部のフロリダ州内で、州の北部、南部からそれぞれ3つのコミュニティを選び、人種差別の調査研究を実施している。その際に選ばれたコミュニティはすべて行政上の市（*city*）で、人口も7,444人から61,921人（1990年）、平均で北部（農業を主とする、貧困地域）で9,111人、南部（半島の東海岸、急激に

都市化した中流階級の多い地域)で42,984人と日本の町内会の比でない。近隣も一般に小学校区の範囲とされ、学校、教会、公園、居酒屋などが含まれ、「市民が彼らのすべての生活時間をその中で過ごしている経済的コミュニティと一致する」(Dewey R.,1950)ほどに広い。以下、コミュニティ、近隣について述べる時、日本社会とアメリカ社会の領域の違いに留意して欲しい。

さて、フィッシャーは、「都市生活は本来人々を疎遠にするのかどうか」とのジンメルやワースらの興味ある問題提起に対して、肯定、否定の両論のあることを紹介しつつ、

私は、このような対立しあっている主張に対して、まず社会的行為の公的領域と私的領域 (the public and private realms) とを区別すること、次にワース派の問いかけに回答しようと努力している最近の研究の調査結果のいくつかを概括すること、こうした手続きを通じて、自分の立場を説明したい、と語る。

そして、彼は、調査結果から都市住民の疎遠さといったものは、ロフランド (Lofland, L.,1973) が「さすらい人の世界」(world of strangers) と呼んだ公的領域に当てはまる、と言う。

私の出発点は、ロフランドのいう都市生活におけるパブリック世界とプライベート世界の区別にある。前者は、人々がお互いに異邦人としての関係を維持するような組織から成り立っており、そこでは、遠慮深く、でしゃばらず、注意深く、非人格的でなければならないという固有のエチケットが求められる。しかし、これはフォーマルで制度上のスタイルのことであって、後者の私的日常の世界では、都市の住民は、長く維持された心底からの多様な関係を失いはしない。

ただし、フィッシャーは、ロフランドにあっては都市の「さすらい人」(異邦人)の世界が考慮されているのに対して、都市はモザイクで異質な人々からなる「一風変わった」(strange)世界であることに関心がある。

今日のアメリカでは、黒人は、街頭で白人に出会った時には恐怖感にしばしば苛まれるし、punk-rockers のごとき若者は、中年の人間をみて苛立つこともある。それは、ロフランドの意味での「さすらい人」の場合と同様に、パブリックな世界での「一風変わった」側面であって、そこではパブリックな非人格性や引きこもり、さらに恐怖感や他者への敵対心が一般的な現象となる。とにかく、都市生活が人々を疎遠にすることも、逆にそうした事実のないことも、両方とも証明しうる事柄なのである。フィッシャーにあっては、かかる矛盾した事実、ワース派は反対するであろうが、都市生活のパブリックとプライベート

トの二つの側面を考慮することで解決しうる事柄なのである。アーバニズムが進行するにつれて、住民のパブリックな活動は、馴染みのない、困惑気味の、恐怖さえおぼえるような人々との接触も生じさせる。その場合、人々の主体的な反応やパブリックな行動は、自分たちとは異なる下位文化のもとにある人々から疎隔される原因となったり、時にはコンフリクト状態を引き起こすことさえある。しかし、同時にアーバニズムが、馴染みのある親しい人々とは一層親交を深めるチャンスになることも事実である。このように、アーバニズムは、パブリックな領域ではますます寄る辺なき、コンフリクト状態にある疎遠な関係を生み出すが、プライベートな領域ではパーソナルな関係や心理的にも幸福な感情を生み出すのである。

4 経験的コミュニティ

4.1 不確定性とコンフリクト

前述の展開から、私は、不確定性とコンフリクトの両概念に注目する。それは、パークやガンスさらにフィッシャーによって導出されたもので、一つは、都市社会の秩序が異質な構造分化の中で交換、交渉、コンフリクトのプロセスを通じて可能となる、との指摘。都市の社会学的分析は、生態学的アプローチでなく、階級やライフ・サイクル、居住の不安定さといった社会経済的要因と結びつけて可能となる。二つには、コミュニティは、重層化した構造であり、人々は近隣の相互扶助的關係と同時に、自分たちの自由な選択に基づいてより広域的な世界と関係を維持している、との指摘。都市社会には「確定した通念」や「標準的な道德規範の様式」はなく、自己の選択的行為が一般的であるがゆえに不確定性が支配している。

私は、ここに現代社会の秩序をめぐる二つの理論との接合の可能性をみる。それは、ポッパー (Popper, K.) やダーレンドルフの「真理の近似理論」 (approximation theory of truth) そしてロールズ (Rawls, J., 1958, 1971) の『正義論』 (theory of justice) である。前者は「無知の知」に、後者は「無知のヴェール」に依拠しながら、両者ともに「不確定性」 (uncertainty, Kontingenz) と「開放性」 (openness, Offenheit) に基づく社会の理論の構築にとりかかる。ただし、ここでは、これらの理論の中の若干の発見物を、しかも本稿と関係する限りで提示するだけにとどめる。このような回りくどい作業を試みるのも、これらの概念が社会学の理論の中に明確に定義されている、と考えるからである。ダーレンドルフは、初期の論文「市場と計画」(1966) および「不確定性、科学および民主主義」(1963) で、権力、抵抗、コンフリクト、歴史的変動、公開性、自由そして不確定性といった彼の好む概念の連鎖を明確に説明している。「市場と計画」では、市場合理性と計画合理性が取り上げられる。市場合理性のもとでは、

権力にはつねに無権力の意味が、したがって抵抗の意味が含まれている。権力と抵抗の弁証法は歴史の原動力である。…規範が設定され、それに対して異議が提出され、修正され、再び異議が唱えられる、という連鎖の系列が存在する。人間社会の進取性（initiative）と史実性（historicity）——これは生命力、開放性と自由を意味する——の源泉がここに潜んでいる。権力はコンフリクトを生み出し、敵対する利害間のコンフリクトは、…つねに新たな解決策を提出し、それにたえず疑問を投げ掛けることによって、人間存在の基本的な不確定性を永続して表現する。

それに対して、計画合理性は確定性を前提にし、あらかじめ決定（拘束）された過程によって統制された活動が一般的なものとなる。その結果、ダーレンドルフによれば、「真理の表出理論」（manifestation theory of truth）ないし「誤謬の陰謀理論」（conspiracy theory of error）で説明される「全体主義社会」が、出現することになる。

社会のメタ理論の領域で、ダーレンドルフは理論化作業を遂行しているが、「不確定の世界では、自由とは正義である」と言っても、そこではコンフリクトや競争の自由が求められているわけで、その場合、コンフリクトや競争における「敗者の問題」は、未解決のままである。開放性や選択可能性の前提である自由をテーマとする限り、チャンスへの接近（平等）は語られても、チャンスの利用（結果の平等）は不問に付されたままである。

ロールズは、この「敗者の問題」に取り組む。本稿では、法理論としての彼の主張を問題としない。ここでは、論文 Justice as Fairness (1957) 及び大著 A Theory of Justice (1971) から、本稿の意図と関連する範囲でポイントと考えられるところを導出する。ロールズが提起する正義の二つの原理は次のようなものである。第一原理：各人は、すべての人々に対する同様な自由と相容れる限りで、できる限り広範な基本的自由への平等な権利をもつべきである。第二原理：社会的経済的不平等は、(a) [格差原理] 正義に適った貯蓄原理と相容れる形で、最も不利な状況にある人々の利益の最大化のために、かつ、(b) [機会の公正な平等原理] 機会の公正な平等という諸条件のもとで、すべての人々に開かれた地位と職務とに伴うように、という二つの条件を満たすように配列されるべきである。（この原理は、諸考察を経て『正義論』に示されたもの。論文では、やや異なった文章になっている）。前者は「自由の優位ルール」で、例えば社会的・経済的有利（格差）な状況が出現しても、そのことで「最大限に平等な自由」が侵害されてはならない、とする。後者の第二原理は、「無知のヴェール」と関係し、公正な手続き（手続き上の正義）のためには偶然性や恣意を排除した上で、「すべての人々」、「最も不利な状況にある人々」は、不平等から利益を得なければならない、とする。

地位や職務は、すべての人々に開かれていないかぎり、恣意的である。これらの原

理、三つの観念、すなわち、自由、平等、公益に貢献するサービスに対する報酬の複合体として、正義を表現している。

この二つの原理は、「特定の行動の徳性や人々の徳性としての正義」、「社会的理想としての正義」といった観念的なものを基礎にしているのではなく、「社会的協働 (social cooperation) に際しての正義」というきわめて実際的なものである。つまり、「社会の基本的諸制度における権利と義務の割り当て方法を提供し、社会的協働の便益と負担の適切な分配」をさだめている。

いま一つ指摘しておきたいのは、ロールズが「原初状態」(original position、重要なタームであるが、ここでは論究しない)での契約当事者について、語っている内容についてである。

彼らは相互に利己的であると仮定しよう。…この社会における人々が、「人」という言葉のすべての意味において、相互に利己的であると仮定する必要はない。相互に利己的であるという特徴づけが、区分の規準が家族である場合に適用されるとしても、家族の構成員たちは情愛の絆によって結び付けられており、自分の利益に反して諸々の義務を喜んで受け入れるということは、依然として真実であろう。家族間、国家間、教会間等々の関係において相互に利己的であるということは、通常、個々の構成員の側における強い忠誠や献身と結びついているものである。それ故、もし社会が相互に利己的な家族あるいは他の何らかの団体から成ると考えるならば、この社会についての一層現実的な考え方を形成することができるであろう。さらに、これらの人々があらゆる状況において相互に利己的であると想定する必要はなく、彼らが共同の実践に参加する通常の場合においてのみ相互に利己的であると想定すればよいのである。

公正の概念を正義にとって基礎的とするものは、お互いに他人に対していかなる権威ももたない自由な人々によって、諸原理が相互に承認される可能性があるという、この考えである。このような承認が可能である場合にのみ、彼らの共同の実践のなかに、人々の間の真の共同性が存在するのである。…幾人かの人々が、ある実践に携わったり、ルールに従って共同事業を行ったりする場合、そしてこのようにして彼らの自由を制限する場合、要求に応じてこれらの制限に服した人々は、自分たちの服従によって利益を得た人々に対しても、同じような服従を要求する権利をもつ。このような条件が妥当するのは、ある実践が公正であると間違いなく承認されている場合である。というのは、この場合、その実践に参加しているすべての人々が、そこから

利益を得るであろうからである。

同様の言い回しは、『正義論』でも、共感、愛、仁愛（人類愛）の概念を肯定的に評価しながら、続いて「公正としての正義は、原初状態にある人を、個人として、より正確には連続する個人の糸として取り上げることから始めるけれども、このことは、人々のコミュニティを一緒に結びつけるより高い順序の道徳的心情を展開する妨げにはならない」（邦訳144頁）と述べている。いずれにせよ、ロールズの主張にみる無知のヴェール（不確定性）、相互性、公開（開放）、手続きにおける「試行錯誤的な自己反省による原理と判断との相互調整」（田中成明、訳書での解説）への関心は、先のダーレンドルフの展開と同様に、今日、社会の理論の構築のための基礎的作業として特筆されよう。

結局、本稿の意図との関連でロールズの主張を検討する時、格差原理で示されているのが「分配の正義」に関する事柄であること、「正義の第一の主題は、社会の基本構造、より正確にいうと、主要な社会制度が、基礎的な権利と義務を分配し、社会的協働からの有利性の分割を決定する方法なのである」（同6頁）という点につきる。そのためには、「集団の福祉というひとつの集計概念」（同17頁）、「生来の能力の分配も、ある点で、集合的資産とみなす」（同135頁）という視点にたつことが重要である。ここには、公共性や連帯性を今日検討する際の、貴重な示唆がしめされている。

4. 2 経験的コミュニティ

前述の「分配」の問題については、古くは柳田国男（1902、1907）にみる「危機管理としての三倉」（筆者）やアルツルイズムに関する考察がある（橋本他 [2002] を参照されたい）。ここでは、これまでの考察を前提にして、「純粹コミュニティ」からの脱出を試みる。

(1) 純粹コミュニティと経験的コミュニティ

表1 純粹コミュニティと経験的コミュニティ

コミュニティ要件	純粹コミュニティ	経験的コミュニティ
環境適応	closed	open
目標達成の手続き	certainty, consens	uncertainty, conflict
統合（行為連関）	close-knit-network	loose-knit-network
文化	homogeneous	heterogeneous

仮に、現今のコミュニティ概念を単純に整理しようとする場合、表に示した分類が可能ではないかと考える。テンニエスのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの分類を想起させ

るかもしれないが、私は、パーク、ガンズ、フィッシャーらのコミュニティの把握、さらに、ポッパー、ダーレンドルフ、ロールズらの実践的、経験的な社会の把握を、この分類の基礎に置いている。その点で、ここに挙げている各要件についての対概念は、私がこれまで述べてきたことを整理しただけのことである。それは、抽象化作業といった高度に「科学的」、「理論的」な装いをほどこしたものではなく、實際上、経験にそくしてコミュニティの要件を整理しただけのことである。「純粹コミュニティ」は、「真正コミュニティ」であってもよいが、コミュニティをしばしば一元的に、それ自体をいわば「純粹に」考察した結果、抽出されたユートピアのごとき集団である。外部環境に対して閉じられており、集団目標への達成手続きは合意に基づく「全員一致」で、そのプロセスはあらかじめ予測されている。コミュニティ内部での行為の連関（相互行為）は、個人行為者にとってはある種の拘束ともいえる規範や慣行などによって規制される。そこでは、個人の選択意志による行為がなされる場合でも、私のいう「強結」ネットワークが一般的である（1995）。コミュニティ内部の文化や価値は、比較的同質化され、またそうあることが求められる。

他方、経験的コミュニティは、外部環境に対して開放され、個人はコミュニティの中に住みながら、同時にコミュニティ外部と接触する。集団目標への達成は、相互に対立した意見や行為の接触、コンフリクト、調整の結果可能となる。その意味で、そのプロセスは予測不可能で、不確定である。人々の行為は、自己選択にもとづいてなされ、行為の連関は緩やかな結びつきである。「弱結」ネットワークと呼んでおこう。コミュニティ内部は、それぞれ異なった文化や価値の遭遇する場となっている。

すでに古く、ダーレンドルフは『ユートピアからの脱出』（1958）で、ハックスレーの『すばらしき新世界』（Brave New World）の統一スローガンである Community, Identity, Stability にふれつつ、ユートピアの5つの特質を列挙している。①ユートピアは曖昧な過去であって未来ではないように、歴史性を欠いている。②社会には支配的価値と秩序に関する普遍的合意が存在していて、構造上生まれてくるコンフリクトを認めない。③ユートピアでは、社会的調和が社会の安定性を説明し、調和の紊乱者は病理学的に逸脱者である。④ユートピアはあらかじめ確定されていて計算可能であり、全体として永久に不動（perpetuum immobile）である。⑤ユートピアは他のあらゆるコミュニティから孤立していて、単一かつ同質的な社会である。

興味あることに、バーセル（Barthel Diane, 1993）は、今日流行気味の劇場型シンボリック・コミュニティ（Staged Symbolic Communities, SSCs, それは現代社会から隔離された理想化されたコミュニティで、現代人の心の中で熱望されている）を取り上げ、このSSCsが先のユートピアの特徴をもっていることを指摘する。同時に、「疎外されることなく調和した人間関係の中で働きたい」とか「人間のスケールに適った生活を営みたい」といった願望は、「上品で洗練され、犯罪とは無関係で、争いごとのない良きコミュニティ」（the

genteel, protected and conflict free community) のイメージと結びつくことで、現代社会からの逃避でなく、社会への批判の機能をもっていることも示唆する。ただし、この SSCs は、イメージなり理想として描かれた社会であって、実践的、経験的なものとしてのコミュニティとは異なっていることは事実である。そこでは、牧歌的で田園的な社会での通過儀礼的な慣行や道徳への郷愁が、眼前に広がっている。

一方で、今日の地域社会が構造分化を深化させ（社会経済的に地域の不均等な展開、個人の自己選択的行為の増加など）ているのに対して、他方では、医療・保健・福祉にとどまらず、教育、防犯、労働、家族など広義の社会的経済的諸問題が、コミュニティの場で登場してきている現状で、コミュニティの「実践的、経験的」な考察が、強く求められている。それは、コミュニティの場で、効率的、(経済)合理的行為による便利で快適な生活の遂行だけでなく、「生活の質」に関して、「何が生活にとって望ましいのか」に関して、さまざまな実践が試みられているところからも理解できよう。同時に、諸問題の解決のために、コミュニティの内外の諸資源をどのように維持・運営・管理していくのかも、コミュニティの課題となってくる。コミュニティの経験的把握、実践的把握のために、規範科学的、政策科学的パースペクティブが要請される。

(2) コミュニティと三層構造

コミュニティを経験的にとらえる場合、私は、コミュニティの三層構造を提案する。

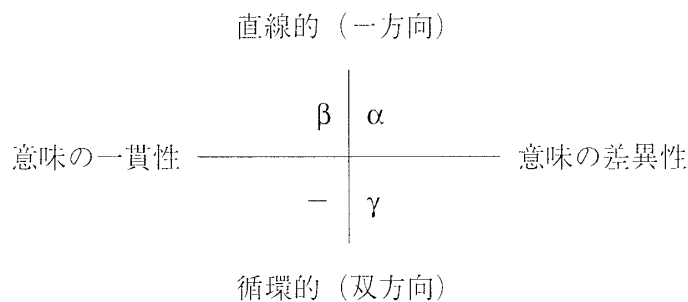


図1 資源移動の分類

まず、この三層構造について述べておこう。先に触れたロールズの主張が、その素材を提供してくれる。彼は『正義論』で、格差原理が、救済原理 (principle of redress) に近いこと、互酬性 (reciprocity) の概念を表していること、博愛 (fraternity) 原理であること、の特徴をもっていることを指摘する。

格差原理は、実際には、生来の才能の分配をある点で共通の資産とみなし、この分配を補整することによって可能となるより大きな社会的、経済的便益を分け合う

ことに、同意することを表している。天性によって恵まれた立場におかれた人々は誰であれ、敗れ去った人々の状況を改善するという条件に基づいてのみ、彼らの幸運から利益を得ることが許される。

格差原理は、相互便益の原理なのである。…より大きな生来の資質をもち、その開花を可能にする優れた性格をもつ個人は、他者の有利性に寄与しない仕方でより一層の便益を得ることができるような協働の図式に対する権利をもつというのは、誤りである。

格差原理のもう一つの利点は、それが博愛の原理に関する一つの解釈を提供してくれるということである。…博愛というのは、様々な公共的集会や服従とか卑屈な態度のないところに現われる、社会的尊敬 (social esteem) の一定の平等を表すと考えられる。

自由、平等についてのロールズ流の理解と同時に、彼が共同関係をその基礎とする博愛について言及するその内容は、共通の資産と分配の補整 (救済) や相互便益 (互酬性) への関心と同様に、本稿に重要な手がかりを提供してくれる。すなわち、彼の指摘は、コミュニティなり近隣という小さな社会で人々が結びあう相互行為のプロセスは、親族、近隣の人々、友人などの入り組んだ互酬的ネットワーク (サービス・ネットワーク) によって維持されてもいることを教えてくれる。この互酬性は、相互に (同時的、世代的) 資源の移動 (循環的、双方向的) がなされると同時に、循環の中で意味の内容を変えていく (意味の差異性)。図2で γ が相当する。

小さな社会の中で生活している人々は、外部のより大きな社会のメンバーでもあり、ここでは相互便益の互酬性の機能ではなく、市場での貨幣交換に基づく直線的 (一方向的) 移動が一般的なものとなってくる。貨幣が交換の単位になることから、意味の内容には変化はない (一貫性)。図2の β が相応する。その他にも、人間の生活を組織化するについては、図2の α で表す「再分配」による資源の移動も考えられる。ロールズの「共同資産」 (共有財) が当てはまるだろう。例えば、税のシステムでは、所得等から吸い上げられた税は、所得保障やサービス保障として所得の再分配を行なっている。再分配の場合、小さな社会の中で実施される頼母子のごときもの (柳田国男の「社倉」も含めてよい) もあれば、政府 (国家) や地方行政政府によって実施される社会保障や社会福祉名目のものもある。前者は循環的・意味差別的と捉えてよいかもしれない。

私がここで展開している、交換、再分配、互酬性の内容については、ポランニー (Polanyi Karl, 1975) に依拠している。翻訳書『経済の文明史』は、ポランニーの諸論文を集めて

訳出されたものである。彼は、「経済的」(economic)という言葉に、「実質的」(substantive)と「形式的」(formal)の二つの意味を区別する。前者の意味は、「人間が生活のために自然とその仲間たちに依存することに由来する。それは、結局において、人間に物質的欲求充足の手段を与えるかぎりでの、人間と自然環境および社会環境とのあいだの代謝を指す」(訳259頁)ものとされ、後者は、『『経済性』』とか『『経済化』』といった言葉に表されている手段-目的関係の論理的性格に由来する。それは特定の選択の状況、すなわち、手段が不足するために必要になる、その手段のいくつかの用法の選択の状況と関係している」(同頁)。そして、過去2世紀の間、西ヨーロッパと北アメリカで、後者の意味での「経済的」が支配的であったが、「人間の生計の組織化」にとって市場だけが全てではない状況に、社会学者は直面している、と言う。そこで、彼が「経済過程の制度化」のパターンとして挙げるのが、互酬、再分配、交換である。

互酬とは対照的な集団間の相対する点のあいだの移動をさす。再分配は、中央に向かい、そしてまたそこから出る占有の移動を表す。交換は、ここでは、市場システムのもとでの「手」のあいだに発生する可逆的な移動のことをいう。そこで、互酬は対称的に配置された集団構成が背後にあることを前提とする。再分配は何らかの程度の中心性が集団のなかに存在することに依存する。交換が統合を生み出すためには、価格決定市場というシステムを必要とする。

表2 資源・サービスと相互行為の制度化

資源移動の場	資源の分類	資源供給主体	相互行為の制度化
市場	商業的資源 (貨幣)	民間	交換
非市場	非商業的資源 (非貨幣)	国家、地方行政政府 コミュニティ	再分配
	連带的資源	コミュニティ	互酬

今日、地域社会において出現するさまざまなリスクに対処するべく、地域の教育力や家族の教育力の「再生」が求められている。自分の意志決定と帰責可能性の程度が増大してくる現代社会では、リスク管理の課題は一層大きくなっている。コミュニティの次元でも、フォーマル組織やインフォーマル組織を含めてCBOs (Community Based Organizations)への期待は高まる。その場合、純粹コミュニティ (例えば、劇場型シンボリック・コミュニティ) への郷愁が、本稿の冒頭で述べたテンニエス・ルネッサンスや、さらにはパーセ

ルの主張にみるように、現代社会からの逃避なのか、それともそれへの批判なのか、ここでは問わないことにする。だが、私の言う純粋コミュニティでは、かかるリスクや危機への対処は困難と言わざるをえない。私が提案したいのは、経験的コミュニティのパースペクティブから、現代社会の適応形態である交換に基づくコミュニケーションとは別に、再分配や互酬性と結びついたコミュニケーションを如何にして可能にしていくか、その方策についてである。

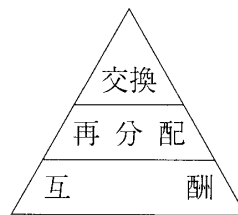


図2 コミュニティの三層構造

本稿では、以上の提案だけにとどめる。まだこれからの課題であるが、互酬の次元では「地域通貨」への関心の高まりには注目してよい。先のポランニーの主張にも触発されて、1990年代に入ってまず経済学の分野で、次に社会学の領域でも「相互扶助」という格好のテーマと結びついて、さらに先進諸国のボランタリー組織による諸活動やその理論化作業の紹介を通じて、90年代後半から問題提起的に文献が発表されてきている。本稿の趣旨からも言及すべき課題であったと考えるが、諸事情から他の機会にゆずる。

* 本稿中の[]は、私の付加した箇所である。

** 本稿作成に際して、邦訳書のある場合にはそれにも目を通すように努めたが、基本的に私が原書から訳出している。原書が手元にない場合は、邦訳書のお陰によっている。

[引用・参考文献]

- Axelrod, M., 1956, "Urban Structure and Social Participation," *American Sociological Review*, 21.(=1965, 鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房.)
- Barthel, D., 1993, "Back to Utopia : Staged Symbolic Communities," *Research in Community Sociology*, 3.
- Bernard, J., 1973, *The Sociology of Community* (=1978, 正岡寛司監訳『コミュニティ論批判』早稲田大学出版部.)
- Button, J. W., 1995, "The Continuing Legacy of Discrimination in Southern Communities," *The Bubbling Cauldron*.
- Castells, M., 1975, "Urban Sociology and Urban Politics—From a Critique to New Trends of Research," *Comparative Urban Research*, 3(1).(=1983, 奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版.)
- Dahrendorf, R., 1958, "Out of Utopia," *American Journal of Sociology*, 64(2).(=1975, 橋本和幸・鈴木正仁・平松闊訳『ユートピアからの脱出』ミネルヴァ書房.)
- Dahrendorf, R., 1963, "Uncertainty, Science, and Democracy," Delius, H. and Patzig, G., eds., *Argumentationen*.

- (=1975, 橋本和幸・鈴木正仁・平松闊訳『ユートピアからの脱出』ミネルウァ書房.)
- Dahrendorf, R., 1963. *Gesellschaft und Freiheit*
- Dahrendorf, R., 1966. "Market and Plan," *a lecture at the University of Freiburg* (=1975, 橋本和幸・鈴木正仁・平松闊訳『ユートピアからの脱出』ミネルウァ書房.)
- Dewey, R., 1950, "Neighborhood, Urban Ecology and City Planners," *American Sociological Review*, 15
- Durkheim, É., 1893, *De la division du travail social - étude sur l'organisation des sociétés supérieures*. (=1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店.)
- Fava, S. F., 1956. "Suburbanism as a Way of Life," *American Sociological Review*, 21
- Fischer, C. S., 1973. "On Urban Alienations and Anomie - Powerlessness and Social Isolation," *American Sociological Review*, 38
- Fischer, C. S., 1975. "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 80(6)
- Fischer, C. S., 1981. "The Public and Private Worlds of City Life," *American Sociological Review*, 46
- Fischer, C. S., 1995. "The Subcultural Theory of Urbanism - A Twentieth-Year Assessment," *American Journal of Sociology*, 101(3)
- Galpin, C. J., Sorokin, P. A. and Zimmerman, C. C. eds., 1930-32. *A Systematic Source Book in Rural Sociology*
- Gans, H. J., 1962. "Urbanism and Suburbanism as Ways of Life - A Re-evaluation of Definitions," Rose, A. M., ed., *Human Behavior and Social Processes*
- Greer, S., 1956. "Urbanism Reconsidered - A Comparative Study of Local Areas in a Metropolis," *American Sociological Review*, 21
- Herlyn, U., 1988. "Individualisierungsprozesse im Lebenslauf und Städtische Lebenswelt," *Kolner Zeitschrift für Soziologie*, Sonderheft
- 橋本和幸, 1992, 「ルネッサンス?」『ソシオロジ』37(2).
- 橋本和幸, 1995, 『地域社会に住む』世界思想社.
- 橋本和幸他編著, 2002, 『高齢化社会と生活選択』多賀出版.
- Hillely, G. A., 1955. "Definitions of Community," *Rural Sociology*, 20
- Lofland, L., 1973. *A World of Strangers*
- Logan, J. R. and Spitze, G. D., 1994. "Family Neighbors," *American Journal of Sociology*, 100(2)
- Maclver, R. M., 1917. *Community - a sociological study* (=1975, 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』ミネルウァ書房.)
- Mellor, R., 1975. "Urban Sociology in an Urbanized Society," *British Journal of Sociology*, 26 (=1983, 奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版.)
- 森野栄一, 2002, 「地域通貨の時代認識」『月刊自治朝』4月号
- Park, R. E., 1915. "The City - Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City," *American Journal of Sociology*, 20(5)
- Park, R. E., 1928. "Human Migration and the Marginal Man," *American Journal of Sociology*, 33(6)
- Popper, K., 1963. "Science-Conjectures and Refutations," *Conjectures and Refutations - The Growth of Scientific Knowledge*
- Rawls, J., 1958. "Justice as Fairness," *Philosophical Review*, 67 (=1979, 田中成明編訳『公正としての正義』本鐸社.)
- Rawls, J., 1971. *A Theory of Justice*. (=1979, 矢島釣次監訳『正義論』紀伊国屋書店.)
- Reitzes, Donald D. and Reitzes, Dietrich C., 1992. "Community Lost - Another Look at six Classical Theorists," *Research in Community Sociology*, 2
- Schulter, C. and Clausen, L., 1990. "Anfragen bei 'Gemeinschaft' und 'Gesellschaft'," *Renaissance der Gemeinschaft*
- Simmel, G., 1903. "Die Grossstädte und das Geistesleben," *Die Grossstadt* (=1965, 鈴木広訳編『都市化の社

会学』誠信書房.)

Siu, P. C. P., 1952, "The Sojourner," *American Journal of Sociology*, 58.

鈴木栄太郎, 1968, 「日本農村の社会構造」『鈴木栄太郎著作集』未来社.

玉野井芳郎・平野健一郎編訳, 1975, 『経済の文明史』日本経済新聞社. この書物は、ポランニーの諸論文を集めたもの.

田中成明著, 1984, 『現代法理論』有斐閣.

Tonnies, F., 1887, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Begriffe der reinen Soziologie.*(=1954, 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店.)

Wellman, B., 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84(5)

Wirth, L., 1927, "The Ghetto," *American Journal of Sociology*, 33(1).

Wirth, L., 1938, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 64(1).

柳田国男, 1902 (1970), 「農業政策学」『定本柳田国男集』第28巻, 筑摩書房.

柳田国男, 1907 (1969), 「日本に於ける産業組合の思想」『定本柳田国男集』第16巻, 筑摩書房.